



【古里の宝物を探す旅】

特集 一関のまちおこし

「ご当地グルメでまちおこし団体連絡協議会」（愛Bリーグ）が年に一度主催するBリーグランプリ。地域に愛される「ご当地グルメ」を使ったまちおこしイベントだ。06年の第1回八戸大会の来場者数は1万7千人だったが、昨年の第8回豊川大会は58万1千人が来場。ご当地グルメを通じて地域を売ることを目指し、国民的イベントと呼ばれるまでに成長した。大会後は、お目当てのグルメを求めて多くの人が各地を訪れるなど、地域活性化の起爆剤としても注目されている。

9回目の今年は10月18、19の両日、福島県郡山市で開催され、本市から初出展した「いちのせきハラミ焼なじよつたべ隊」が自慢の料理とパフォーマンスで古里一関を全国に発信した。今号では、最大級のおもてなしで45万人のお腹と心を満たした「ご当地グルメでまちおこしの祭典 Bリーグランプリin郡山」をレポートしながら、食を通じ、絆を広めたまちおこしの真骨頂に迫る。（特集15ページまで）

あいな人 File\_26  
いちのせきを愛する人

地元で伝わる牧澤神楽の上演会を開催

阿部繁行さん

Abe Shigeyuki 63 真柴



次代へのレールを敷く  
地域と共に歩む神楽を目指し

伝承から100年。牧澤神楽の代表を務める阿部繁行さんは「中学生の頃は神楽から逃げていたんです」と話します。

当時、祖父繁雄さんは真滝中学校で神楽の指導をしていました。家族が生徒の前で話したり、舞ったりするのが気恥ずかしく、繁行さんは神楽が好きになれませんでした。

その後、繁雄さん、父繁美さんが亡くなり、牧澤神楽は後継者不足で一時途絶えます。父の葬儀で叔父甲子雄さんは中学生だった繁行さんの息子たちに「牧澤神楽を継ぐのはお前たちだ」と諭したそうです。時は流れ、平成10年。社会人になった長男聖樹さん（37）が同級生を連れて、繁行さんに「神楽をやろう」と直談判。その熱意に根負けした繁行さんは、牧澤神楽を復活させることにしました。復活当時は、舞い方、太鼓、セリフも分からず、ビデオを繰り返し見ながら試行錯誤を続け芸を磨きました。現在も、周囲から芸風の違いに意見をもらうこともあります。私たちがほど牧澤神楽の芸風を大切にしている演者はいない」と言い切るほどに成長。現在のメンバーは8人。繁行さん、室根在住の長男聖樹さん、繁行さんと同居する二男大樹さん（35）、長女で市内に嫁いだ美佳さん（32）など家族を中心とした30代の若手で構成しています。「いろいろな演目を行うには、もっと人を集めなければ」と、後継者の発掘に努めます。9月21日には、地元の八幡神社で上演会を開きました。この上演会は、市教育委員会の南部神楽

調査研究事業の一環で、調査を担当している大阪の追手門学院大学の橋本裕之特別教授が「後継者の確保は、地元で公演し、理解を得ることが大切」と企画したもの。当日は、120人を超える人たちが神楽を鑑賞しました。

「私は次の世代に向けてレールを敷くだけ」と自身の役割を話します。美佳さんの娘で孫の絢音ちゃん（3つ）も太鼓の脇で鉦を叩き、舞台上がっています。

繁行さんが敷いたレールは、着実に未来の牧澤神楽へとつながっています。

Profile

1951年一関市生まれ。市内高校を卒業後、電電公社（現NTT）に就職。2007年退職。現在は農業の傍ら、牧澤神楽の代表を務め、南部神楽の伝承に励む。妻、二男夫婦、小1、4歳、2歳の孫3人の7人家族。孫たちが神楽を舞うことを夢見ている。

COVER STORY

開校50周年の節目飾る 一関高専が初優勝



一関工業高等専門学校硬式野球部は8月23、24日の両日、香川県で開催された第49回全国高等学校体育大会で見事初優勝を飾りました。一関高専は6年ぶりに東北大会で優勝。東北代表として4度目の全国大会に挑みました。初戦で勝利を挙げて波に乗ると、準決勝、決勝で強豪校を相手に逆転勝ち。

10月6日には市役所を訪れ、佐々木俊郎主将から「開校50年の節目を全国優勝で飾ることができ光栄です」と優勝を報告。決勝でサヨナラヒットを放った佐々木祐太選手は「チーム一丸で成し遂げることができた優勝。来季も1勝を大切に、全国大会を目標に頑張りたい」と活躍を誓いました。